

だんぢょん



攻略入門

セーラー Moon RPG ①

だんぢょん攻略入門

深森薫

ルナル・シティの冒険者の店『青旗亭』は、大通りを東へ外れた路地にあつた。夕刻ともなると大方の宿屋は人でごった返すが、『青旗亭』の店内もその例にもれず、様々な種類の人間がテーブルを埋めている。空になつた皿をうず高く積み上げる冒険者の一行。一人ちびちびと酒を流し込む老人。客相手に弁舌をふるう恰幅のいい商人。食事もそこそこに酒を浴びるむくつけき男ども。

その喧噪の中で、マーキュリーとジュピターは遅めの夕食にありついていた。

「……結構、いい町ね」

白身魚の香草蒸し定食をつつきながら、マーキュリーが言った。淡いラベンダー・グレーのローブに身を包んだ白皙はくせきの美女である。短くまとめたブルーブラックの髪と静かな光を湛えた深蒼の瞳が、知的な印象を与えた。胸元に光るペンダントの紋章から、彼女が知識の神ラーダの司祭であることが分かる。

「活気があつて、清潔で、治安も良さそうだし」

仕事柄、彼女のソプラノの声は細い割によく通つた。

「んー、そうだね。でも」

向かいの席のジュピターは、ホロホロ鳥の姿焼きと格闘している。金属製の軽鎧を身につけた長身の女戦士は、少し癖のある栗色の髪を上の方でポニーテールにまとめている。腰には大振りなバスタード・ソード。

「あんまり平穩無事でも、それはそれで退屈かもよ」

むしり取つたも肉に豪快にかぶりつきながら答えた。

「それはそれでも、いいじゃない」

マーキュリーはつけ合わせのニンジンにフォークをぶすりと刺し、
「人々が何事もなく平和に暮らしているなら、それに越したことはないわ」

聖職者らしい口振りでそう言った。

……困ってる奴がいなきや、あたしたち冒険者はおまんまの食い上げなだけど。

言いかけてジュピターは残りの言葉を飲み込んだ。下手なことを言えば、また食事もそっちのけで延々と説教を聞かされることになりかねない。

「うん、まあ、そりゃそうだ、ね」

とりあえずそう言ってお茶を濁すことにする。

「……ジュピター、鼻の頭にソースが」

「え？ あ、ああ」

言われてジュピターは親指で鼻の頭を拭い、ついたソースをべろりと舐めた。しかし、顔を拭いたその手がそもそも汚れているのだ。

「あ。頬にも」

また言われて今度は頬を拭おうとするジュピターだが、褐色のソースの斑点があちこちにふえるばかりである。その仕草にマーキュリーは困ったように小さく笑うと、テーブルに身を乗り出し手を伸ばした。

「あー……ちょっと、じっとしてて」

自分の膝の上からナプキンを取り上げ、ジュピターの顔についたソースを丁寧にぬぐい取ると、また元のように座りなおして食事を続ける彼女。慣れた手つきで、もうすっかり日常の一部のようである。

当のジュピターは少し照れくさそうに、

「……ねえ、マーキュリー、それ、美味しい？」

半ば話題をすり替えるようにそう尋ねる。マーキュリーはくすりと笑って「ええ」と答えると、白身魚をジュピターの皿に取り分けた。ジュピターもお返しとばかりにホロホロ鳥を彼女の皿に取り分ける。

やがて店のフロアの真ん中で、吟遊詩人が豎琴を爪弾きながら得意の英雄物語を謡いはじめる。二人は明日のことを相談しながら、安らかな夕べのひとつときを楽しんでいた。

*

「……お取り込み中、失礼」

不意に聞こえた声は、女のそれだった。見れば、二人のテーブルの前に黒マントに黒フード姿が立っている。細身のシルエットは、やはり女性のものだ。顔はフードの陰に隠れてよく見えない。

「見た所、あなた達、冒険者のようだけど」

黒尽くめの女は確かめるように尋ねた。凜とした、若い声である。

「あー、うーん、まあ……」

「……平たく言うと、そうなりますが」

二人は歯切れの悪い返事をした。確かに当ての無い旅の空の身——広い意味での冒険者——ではあるが、前人未到の秘境探險や凶悪な魔物退治といった、いわゆる冒険譚とは未だ縁がない。

「それで、今、特に急ぎの用事は？」

「いやあ、別に……」

ジュピターは同意を求めるようにちらりとマーキュリーに視線を送った。

「ええ。特にこれといってありませんが」

「——それじゃあ」

返事を聞くと、女は満足げに言葉を続け、

「どう、あなた達……私と組まない？」

目深にかぶっていたフードを脱いだ。

二人ははっと目を見開いた。

目の醒めるような美形である。歳の頃は二人とそう変わらない。美形は互いの顔でじゅうぶん見慣れていると思っていたが、目の前の彼女はそれはもう凄絶に美しい。

肩にはらりと落ちる、艶やかな黒髪。

強い光を宿した闇色の瞳。

端がわずかにつり上がった、猫の目。

筆でさっと引いたような、すらりとした眉。

薔薇の唇。細い顎。

「私はマーズ、生業は魔導士よ」

そうやって彼女はクールな表情を微かに和らげた。

*

こうして二人の夕食のテーブルに黒尽くめの魔法使いが加わった。マーキュリーとマーズの前には鮮やかな紅色の果実酒のグラス、ジュピターの前には追加のシチューが置かれている。

魔導士は、ある遺跡を探索するために仲間を探しているのだと言った。

「遺跡……古代魔法文明の、ですか」

マーキュリーの声音に好奇の色が混じる。彼女も魔法を使う者だけあって、この手の話題にはさこぶる興味を掻き立てられるらしい。そんなマーキュリーの乗り気な様子に、マーズは機嫌よく話を続けた。

「そう。そして、そこに封印されているのは、国を一つ滅ぼしさえしたという、禁断の魔導書」

ルナル・シテイの北東、ヒーザンの森と呼ばれる所にその遺跡はある。マーズが別の遺跡で偶然見つけた石版に、その概要と正確な場所の記述があったという話だ。

「でも。ヒーザンの森の遺跡といえば、あの『黄昏の大神殿』でしょう？ ずいぶん昔に発見されて

から、冒険者たちに隅から隅まであさり尽くされてもう何も残っていない、と聞きましたか」

「ふふん。そう思うでしょ？」

マーズは得意げに人差し指を立てた。

「それが、あるのよ。ヒーザンの森の、大神殿のあるのとは反対側に、未知の遺跡が。小さなものだから、あまり目立たなくて今まで誰にも見つからなかったのね」

そして、まだ手つかずの遺跡だからお宝もそのまま残っている筈だ——マーズはそうつけ加えた。

「ふうん……悪い話じゃ、ないね。……でも」

シチューを口に運びながら黙って話を聞いていたジュピターが皿から顔を上げ、マーズに面と向かった。

「一つ、聞きたいね。」

どうして、あたし達を選んだんだい？ 冒険者なんて、他にもいくらでもいるだろう、腕の立ちそうなのが。お宝探しなら、誰だって二つ返事で受けてくれるさ。特に、あんたみたいな美人なら、例えばあいつらなんて——」

そう言って、ジュピターは持っていたスプーンで冒険者の一行らしき客のテーブルを指した。鎖鎧に長剣を帯びた、精悍な顔の男。板金鎧で身を固め、戦斧を持ったドワーフ。不精髭の軽装の男は、たぶん盗賊だろう。

「——喜んでついてくるだろうよ」

「……冗談じゃないわ、そんな連中」

グラスの中で揺れる赤い水面をじっと見つめながら、マーズは涼しげな顔で答えた。

「私、男は信用しないことにしてるの。変な功名心だの見栄だの面子だのに駆られて先走るし、名譽のため、なんて言ってる先から金に目がくらんでへマをやる。女の色香にはコロツと騙される。肝心なところで意気地がない。ろくなもんじゃないわ」

「……それで。丁度いい具合に女二人でメシ食ってるあたし達を見つけた、と？ 女ばっかりのパーティーなんて、そうそうあるもんじゃないもんな」

少しむっとしたようなジュピターの声音。

「そうね。でも、正確に言うのと、見つけたのは昼間。広場でチンピラに絡まれてるお婆さんを助けたでしょ。あなた達の腕前と人柄はその時に見せてもらったわ。その上で、あなた達に声を掛けた。決して誰でも良かったわけじゃない、その辺は誤解しないでね」

そう言つて魔導士はグラスの酒を一口喉に流し込み、

「さて……それじゃ、返事を聞かせてもらおうかしら？」

マーキュリーとジュピターの顔を交互に見やった。

腕を見込まれた、という一点でジュピターは納得し、返答を思慮深い相棒の神官に委ねる。少し考えた彼女は、自分達は遺跡の探索に関しては全くの素人だがと断った上で、それでもいいならとマーズの申し出に同意した。

「そう。じゃあ、交渉成立ね」

マーズはポーカーフェイスに微かな笑みを浮かべ、残った酒を一気に呷ってグラスを空けた。

「乾杯といきましょう、冒険の成功を祈って。ここの勘定は、私がおごらせてもらおうわ」
「えっ……あの……本当に、いいんですか……」

「おーっ、よし、そんじゃあ、遠慮なく。」

マスター！ こっちにタイガーフィッシュの姿揚げと石貝の酒蒸しと、クラゲの海草サラダと、山バトのスパイス焼きと、手長エビのピラフとチーズポテト追加っ！ あ、それからデザートにリンゴの砂糖漬けね！」

その後、マーズは自分の言葉を激しく後悔した。

*

翌朝、一行は街で必要な物を買った後、ヒーザンの森を目指して旅立った。大陸を東西に横切る『銀の街道』を東へ一日歩を進め、その夜は街道沿いの村に宿を取ると、翌日は街道を外れて平原を横切る小径を北へ向かった。

小さな林を通り抜けた三人は、やがて広大な森に突き当たった。周囲に人の気配は無い。モンスターや狼の徘徊する古代の森、ヒーザンである。一行は遺跡の場所を知っているマーズを先頭に森に分け入った。

「なあ、マーズ……」

緑と褐色の薄暗く変化のない森の風景に飽きた頃、ジュピターがぼやくように尋ねた。

「あたし達、ほんとにちゃんと遺跡に向かってんのか？」

「もちろん。真っ直ぐ向かってるわよ、最短距離で」

「そういえば、マーズ。昨日から一度も地図を開いてませんが、大丈夫なんですか？」

「地図？」

続くマーズの問いに、マーズは平然と答える。

「そんな物、ないわよ」

「……はいい？」

ジュピターが頓狂な声を上げた。

「だって、石版は置いて来ちゃったし、写しも取らなかつたから。うっかり地図なんて持ってたなら、失くしたり盗まれたり危ないでしょ。ここに入れてくのが一番なの」

マーズはそう言って自分の頭を指した。

「んなこと言って、本っ当にちゃんと覚えてんのか？」

「つたり前でしょ。あんたなんかとは頭の造りが——」

言いかけてマーズは突然言葉を切り足を止めた。

あとに続く二人も足を止める。

「？　なんだ、どうした——」

答えを求めるまでもなく、ジュピターもそれに気付く。

森の奥から漂う気配に。

それは決して友好的なものではなかった。

バスタード・ソードを抜き、前が出る。

青眼に構えたのとはほぼ同時。

正面の茂みを割って飛び出す影が二つ。

真っ直ぐに襲いかかってきたそのうちの一つを、ジュピターの剣が叩き落とした。もう一つは、

「『光の矢』！」

マーズの放った魔法の光が撃つ。影は、ぎゃつという短い悲鳴とともに地面に落ちた。

小柄な体に不釣り合いに大きな目。擦り切れた衣服に屑鎧を纏ったシルエットは人のそれだが、赤褐色のざらついた肌は人のものではない。ゴブリンである。平和的な生き物全てを憎み、それらを傷つけ痛めつけることを喜びとするという、この世の醜悪を一身に集めて創られた妖魔。

錆びかけたショート・ソードを振り上げたゴブリンの胴にジュピターの剣が打ち込まれる。『片手半』の名を持つ剣の重い刀身は屑鎧もろとも妖魔の胴を薙ぐ。続いて斬りかかってくる敵の剣を受け流し、上段から斬撃を叩き込む。

大ぶりの剣を棒きれのように軽々と振り回し、無駄のない素早い動きでジュピターはあつという間にゴブリン軍団の数を半減させた。残ったゴブリン達は間合いの外で二の足を踏んでいる。彼らを睨み付けたジュピターが、

「失せろっつ！」

一声怒鳴ると、ゴブリンはクモの子を散らすように森の奥へと逃げ帰っていった。

「……折角、大技見せてあげようと思ったのに」

唱えていた呪文を放つ機会を与えられなかったマーズは、ジュピターの腕前に遠回しの贅辞を送る。マーキュリーは何を言うでもなく、ただ安堵の微笑で迎えた。

*

広大な森の、かなり奥の方にその遺跡はある。結局目的地にはたどり着かぬまま日が暮れ、一行は森の中で木がまばらなところを見つけ、そこで野宿をすることにした。

ばさばさばさばさつ……

ふいに聞こえてきた羽音に、野営の準備に動き回っていた三人は、手を止めて天を仰いだ。木々の梢の間に小さく開けた暮れの空に、黒い影が現れる。

ジュピターは右手を剣の柄にかけた。

「待って！」

マーズが強い口調でそれを制止する。

「大丈夫、手を出さないで。あれは——」

影は、二つ。

大鴉である。

マーズは両手を高く差し伸べた。滑るように真っ直ぐに飛んできた二羽の鴉は彼女の頭上でくるり

と輪を描いて、差し出された腕にふわりと舞い降りる。

ジュピターは呆気にとられて、甘えるように擦り寄る二羽の黒い鳥に軽く口づける魔導士を不思議そうに見つめた。

「あなた達には、まだ会わせてなかったわね。」

「こつちがフオボスで、こつちがデイモス」

「フアマリアア使い魔……ですか？」 マーキュリーが訊く。

「ええ」

「？」

『フアマリアア使い魔』——魔法使いとその精神や五感を共有し、その目となり耳となり働く動物である。

「ずっと、上から見ていたのですね。だから迷う心配はいらない、と」

「そういうこと。話が早くて助かるわ」

「??」

話についていけない人が約一名。

そのあとのささやかな夕食の間じゅう、ジュピターは二人がかりの説明を受けた。

「……ということ。鴉の羽をひっこぬいたら、マーズが痛がる、ってことか？」

「ま、そういうことね……だからって、試してみようなんて思うんじゃないわよ」

即席パーティーの、森の一夜は何事もなく更けていった。

「さあ、着いたわ……ここが、そうよ」

翌日、森のさらに奥へと一行を導いてきたマーズは、自信たっぷりにそう告げた。そこは地面に高低差があり、目の前が三メートルほどの崖になっている。周囲に特に変わった様子はなく、三百六十度ぐるり緑の森が広がるばかり。

「ここ、つて……」

「どこにンなもんがあるんだ？」

「まあ、見てなさい」

マーズはそう言つて崖の方へ歩み出ると、露出した固い土に軽く手を触れ呪文を唱えはじめた。精霊語である。

『地の精霊ノーム、我が導きに応じ、地を穿ちて我の前に道を開け。』

彼女の言葉とともに、軽い地響きを伴つて崖の真ん中に大穴があき、その奥に鉄の扉が現れた。

鍵のかかった扉の前に、マーズは再び呪文を唱えはじめた。先刻のそれとは、リズムも音韻も異なる言語である。

やがて、扉の奥でかちつ、という金属音がした。

「さあ、行きましょ」

数百年ぶり——ひよつとすると、千年ぶりに、いかにも重そうな音を立てて開く鉄の門。古代の闇

*

の中へ今、三人の冒険者達は足を踏み入れた。

*

通路は、緩やかな下り坂を作って真っ直ぐに伸びていた。

カンテラの明かりとマーズの呼び出した光の精霊とが、苔に覆われた側壁を照らし出す。ひんやりと湿った空気は少しカビ臭い。一行は慎重に歩を進めたが、ほどなく石畳の回廊は岐路に突き当たった。

「どっちだ？」

「さあね。遺跡の中のことまでは知らないわよ」

「……では、神託を仰いでみましょう」

肩をすくめるマーズの横から、マーキュリーがしずしずと進み出た。彼女は錫杖を目の前にかざすと、何やら呪文のようなものを唱えはじめる。後ろに控える二人に、彼女の神聖語は解らない。

ごごご

神への祈祷を終えたマーキュリーは、錫杖を握る手をぱつと離した。杖は自然の理に従って足下の石畳の上に落ち、

……かしゅん……

ゆっくりと右に倒れた。

「御神は『右』だとおっしゃっています」

「よし。じゃ、そっちへ行こう」

「……こちら」

さっさと歩き出そうとする二人に、横からマーズが突っ込んだ。

「今のどこが神様のお告げなのよ」

「何か不審な点か？」

「？　なんか変か？」

「……………いえ……………どっちでもいいわ、もう……………」

至極真面目な二人に、それ以上のツツコミを入れる気力の萎えてしまったマーズは黙ってお告げに従うことにした。

「さ、行こ行こ」

がこんっ！

先頭を歩きだしたジュピターの足許の床がいきなり口を開ける。

「わっ！！」

がしゃっ！

☆\$∞#♂・∑⌘@※≡○&★！

金属音は、石の床に鎧が激突する音らしい。

「ジュピター！……………大丈夫、です、か？」

思わず駆け寄るマーキュリー。穴はそう深くはなさそうで、ちょっと安心。だが、人が自力で這い上がるには少々高い。

「ったく、お約束な罠に引っ掛かってんじゃないわよ」

マーズはぶつくさ言って何やら呪文を唱え——どうやら『浮遊』の術のようである——ふわふわと穴の底へ降りてゆき、ひっくり返っているジュピターを拾い上げた。

「ジュピター。怪我は、ないですか？」

「いつつ……ああ、うん、ちよっと擦りむいた」

「……頑丈ね、あんたって……」

きりきりきりきりきりきりきりきりきり

がっ……こん

そのうち、鎖を巻き上げるような音がして、口を開けた床は再びもとの石畳に戻った。その様を物珍しそうに見ている二人に、マーズは軽く溜息をつきながら言った。

「ま、やばいものを封印したダンジョンだからね、罠があつて当然よ。ただの落とし穴でよかつたわ。……さ、行くわよ。今度はもう少し慎重に、ね」

*

通路の突き当たりは、扉になっていた。他に扉や脇道はなく、どうやらそこをまっすぐ行くより他

になさそうである。

「鍵、掛かってんだろ、どうせ」

先頭を進んできたジュピターがドアの前に立った。取っ手をひねると、意外にもすんなりと回り、かちっ、と音がした。

「なあんだ……………」

開いてるじゃん、と思いかけた瞬間。

体の中で警報が鳴った。

全身が総毛立ち、本能が体を動かす。

ドアノブを掴んだ手をはなし、後ろに跳びすさった。

それと時をほぼ同じくして、

がきょん！

天井が開き、

しゅばばばばばっ！

鉄の槍が雨のように降りそそぐ。

「…………ひよええええ……………」

紙一重で何を逃れたジュピターは、へたり込んだまましばし声も出ない。魔法使いの二人も絶句する。

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

がっ……………こん

そのうち、槍の一本一本につけられた鎖が巻き上げられ、天井もまた元のように閉じられた。

「……………」

「……………」

「……………さて」

嫌な沈黙を破ったのはマーズだった。平静を装っているが、内心動揺しているらしいことがその声でわかる。

「で、鍵は、掛かってたの？」

「え？ ……さあ。ノブは回ったけど……………」

「ま、いいわ。とりあえず魔法かけてみましょう」

おもむろにマーズは呪文を唱えた。かちっ、という金属音がして、鍵が開いたことがわかる。

「さて。問題は、これからね……………」

「どうやってここを通りましょう。ノブを回すと、槍が落ちてくる仕掛けですね」

マーカーキリーは、天井をじっと見つめながら言った。

「かといって、ドアの向こうを確かめもせずに飛び込むのも嫌だし」

「今、槍が落ちてから巻き上げられるまで、少し時間がありましたね」

顎に手を当て、考えるポーズでマーカーキリーが言う。

「そうね。もう一度今みたいに槍を落として、その間に全員が通り抜けりゃいいのよ」

「でも、どうやってあの罨をもう一度発動させます？」

「それは……」

マーズはちらりと視線を流した。

ジュピターの背筋を寒いものが走る。

座り込んだまま、ぶんぶんと首を横に振るジュピター。

「さつきと同じようにすりゃいいのよ」

構わず言い放つマーズ。ジュピターが首を振るのにあわせて、鎧がかちやかちやと鳴る。

「同じように、ですか」

マーキュリーも首を巡らす。

目が合うと、ジュピターの瞳が悲しげに潤んだ。

「……では、私がやります」

「はあ？」「ほえ？」

言ったのは、マーキュリーである。予想外の反応に、あとの二人は呆気にとられた。

「私がやります」

彼女はもう一度、はっきりとそう言った。どうやら本気らしい。

「ちよつ、ちよつと、待ちなさいよ。何でまた、そんな」

マーキュリーは錫杖を壁に立てかけて置くと、

「ジュピターばかり危ない目に遭わせるわけには、いきませんから」

少しはにかんだ表情でそう言った。

「……マーキュリー……」

じいじいじいじい。

何とも言えぬ気持ちで胸を満たす。

ジュピターはすつと立ち上がり、長い両手を伸ばして彼女を遮った。

「いいよ、あたしが、やるよ」

「……でも……」

「あの……もしもし？」

マーズの声など聞こえない。

二人の世界である。

「いいよ、その気持ちだけで、十分、嬉しい」

「けど……」

「……………おーい」

「いいんだ。危ないことは、あたしの役目なんだから」

「……………ごめんなさい」

「別に、あやまることじゃないさ。そのかわり、怪我したら、ちゃんと治してよね？」

マーキュリーは少し俯いて、小さく頷いた。

かくして。

がきょん！

しゅばばばばばっ！

一行は、何とか無事扉を通過したのだった。

「……なんか私がとんでもない悪党みたいじゃない……！」
納得いらない人が、約一名。

*

無言で進むうちに、通路はまた一枚の扉に突き当たった。

「どうします。開けますか？」

マーキュリーが尋ねる。

「もちろん。じゃ、ジュピター」

「……また、あたし……？」

ジュピターの目がうるうるしている。

「そーよ。あんたが一番頑丈なんだから。『危ないことするのがあたしの仕事』でしょ」

「……しくしくしく……」

「泣いてもダメ」

「……………はい」

ジュピターは洪々扉を開けた。

特に変わった様子はない。横と奥の壁面に扉が一つずつある以外は、本当に何もない小部屋である。ジュピターが中に踏み込み、そのあとに二人が続いた。

「どっちに行きますか？」

「もちろん、両方開けてみる」

「……はいはい」

だが、その必要はなかった。

がこんっ！

奥の扉が勝手に開き、わらわらと現れるアンデッドの団体様。

粗末な鎧と剣で武装した、笑う髑髏。

はみ出した内臓をずるずる引きずるゾンビ。

脳みそが鼻からタレそうなグール。

ちよっぴり甘酸っぱい臭いがあたりに漂う。

「うげっ……」

ジュピターの片頬がひきつった。とりあえず剣を抜いたが、愛用の蛮刀にぐちゅぐちゅに腐った肉が絡み付くのはちよっつと嫌だった。それに、スケルトンはともかく、グールなぞ斬った日にはとろけた脳みそがびちよっつ、とあたりに飛び散りそうである。

思わず想像して、剣を構えたまま後ずさり。

さしものマーズも顔をしかめたが、すぐに攻撃呪文の詠唱にかかった。得意の炎の術である。

『猛き炎の精獣よ、我が導きに応——』

「……『退タイン・アンデッド魔』」

一足先に唱えはじめたマーキュリーの神聖魔法が完成した。錫杖を掲げ解き放った祈りの力が、彼女を中心に四方に広がる。その力に飲み込まれたアンデッド達は凍り付いたように一切の動きを止め、次の瞬間、その体が白い炎に包まれた。彼らはまるで苦痛でも感じているかのように——アンデッドが痛がる筈はないのだが——咆吼を上げ、体をのけぞらせ、やがて塵となってその場に崩れた。

……から……ん……

スケルトンの持っていた錆びた剣が、乾いた音をたてて石の床に落ちる。

二人はしばし呆然としてマーキュリーの方を振り返った。

「あつ、ええと、その、今のは『退魔』の術なんですが」

二人の驚いた表情に、彼女は今さらな説明をおさおすとはじめた。

「神官なら、誰でも使える術です」

「……んなこと、言われなくたって分かるわよ」

少しむっとしたように答えるマーズ。

——とんでもない。

神官なら誰でも、なんて。

これだけの数のアンデッドを呪文たった一つで消滅させることのできる神官など、そうそういるも

のではない。とぼけた言動に惑わされて見くびっていたが。

……できる。

マーズは内心舌を巻いた。

「やあ、すごいすごい。おかげで助かったよ」

ジュピターはゾンビやグールのぶにゅぶにゅのぐちよぐちよに触らずにすんだことを単純に喜び、賞賛の声を上げた。

「ふうん……結構、やるじゃない」

長い髪をうるさそうにかき上げながら、マーズも一応その功を讃えた。が、おいしいところを全部持っていかれたので、少々御機嫌ななめである。

「ささ、次行こーぜ」

アンデッド軍団に圧勝したことに気をよくしてか、ジュピターはそれまで嫌がっていた先頭に立ち、意気揚々と歩き始めた。

*

階段を下ると、道は二手に分かれていた。

「さて、どっちに行く？」

どちらの道も突き当たりは無骨な鉄の扉で閉ざされている。ただし、扉までの距離は右の道の方が

左に比べて長い。一行はまず手近な左の扉から開けることにした。例によって最初に扉を開けるのはジュピターの役目である。

重い鉄の塊をほんの少し手前に引き、聞き耳を立てる。怪しい気配——例えば、何かが中で蠢くようないは無さそう。今度はさらに大きく扉を開けて中の様子をうかがう。暗闇から突然何か飛び出してくる、ということも無かった。

ジュピターは手にした明かりを掲げた。苔のむした石の壁が浮かび上がる。さして珍しくもないただの小部屋のような。

ただ、他の部屋にはなかったものが、そこにはあった。

「ん？」

ジュピターは明かりをかざして覗き込んだ。残りの二人もあとに続く。

「宝箱？……じゃ、ないよな」

奥の壁にびったりとくっつけるように置かれた、細長い物体。硬そうな木に金属で補強が施された箱形のそれは、宝箱にしては大きかった。

「……あれは、棺桶です」

後ろからマーキュリーがぼつりと言った。

「ああ、棺桶ね。さすが神官、よく知って……」

地下迷宮＋棺桶Ⅱヴァンパイア

ジュピターは息を飲んだ。マーズも表情を固くする。

ただのアンデッドと違い、ヴァンパイアとなるとかなり厄介な敵だ。一行は慌てて部屋を飛び出すと、鉄の扉を元通りしっかり閉めなおして息を殺した。やがて棺桶が開いて中から空腹の吸血鬼が……という気配はなさそうである。ヴァンパイアの眠りを妨げずにすんだことを幸運に思いながら、三人はもう一方のドアへ走った。

もう一方のドアの内側は、陰鬱な地下墓地だった。

ぼうつ と光る苔が青白く型どる墓石のシルエットが、不気味さを一層引き立てる。

「……どおりでね、やたらアンデッドばかり歩き回ってるわけだわ。こんな所に、墓場なんて」

いかにも嫌そうにマーズが言った。しかし、埋葬されている筈の死体は皆「出払って」しまったらしく、墓場の中をうろついているモンスターはいない。

「ここも、行き止まりのようですね」

と、辺りの様子を調べていたマーキュリー。

「つてことは、ここが一番底、つてことか？」

「……馬鹿な。そんな筈、ないわ」

微かに表情を曇らせるマーズ。

「ここに魔導書が納められていることは間違いないもの。どこかに絶対、奥へ続く入口があるはずよ」

「どこか、つて……ここにはなさそうだがぞ」

「そもそも最初の分かれ道で間違ってた、とか？」

「全知の神ラーダの御神託です、間違いはありません」

敬虔な司祭はわずかに語気を強めた。

「今まで通ってきた所の、どこかに通路が隠されている筈です」

「うーん……でも、ここまでで、扉という扉は全部開けてみたよな」

『……………』

全員が頭を抱えて黙り込んでしまった。

ついに探索断念か？

「……………あ」

やがて、マーキュリーが顔を上げた。全知の神ラーダは、敬虔な司祭にインスピレーションを与え賜うたようである。

「ありました。まだ開けていない扉が、一つだけ」

「えっ？」「どこ！」

マーズとジュピターは、期待に顔を輝かせた。

「棺桶の扉です。さっきの、小部屋の」

……その輝きは、一瞬で消え失せた。

小部屋に戻った三人は問題の棺桶をとり囲んだ。

「ジュピター、覚悟は、いい？」

マーズが尋ねる。

「……覚悟、って……なんか、やだな、それ」

ジュピターの不平を無視して、マーズは先を続けた。

「じゃあ、私達が呪文を唱え終わったら、蓋を開けて。

で、中身がいたら容赦なく攻撃する。OK?」

「……ああ、OK」

二人の魔法使いはそれぞれ呪文を唱えはじめる。ジュピターは短剣を握り締めた。ヴァンパイア相手に普通の武器は通用しないが、今その刀身は神聖魔法の加護を受けて白銀の輝きを放っている。

やがて二人の呪文詠唱が止まった。

ぎっ……ばたんっつ!

決死の覚悟で木製の重厚な蓋をめくり上げる。

そこには、吸血鬼の代わりに、遺跡のさらなる深みへと探索者をいざなう階段があった。

*

「ちっ……またかあ」

軽く舌打ちをして、ジュピターはうんざりしたようにそう言った。

眼前の無骨な鉄の扉の前に立ちはだかる、完全武装の骸骨兵。古代の魔導士によって生み出された

忠実な番人は、はるかな時を経た今、不心得な侵入者を排除するべく動き出した。

円月刀を振り上げる骸骨に向かって、マーキュリーが神聖語の呪文を唱えはじめた。

「『退^{タリ・アンデッド}魔』」

『力あることば』が解き放たれ、不可視の力が四方に広がる。

その力に飲み込まれた骸骨兵は——いっこうに構わず向かってきた。

「な、なっ！」

振り下ろされた円月刀を、ジュピターは自分のバスタード・ソードで受け止めた。予想外の展開のため、剣は鞘に収めたままである。マーキュリーも、自分の術が効かなかったことに動揺する。

「『光の矢』——」

ジュピターとつばぜり合いをしていた骸骨を、マーズの放った白い魔力光が貫いた。骨だけのその体が大きくのけぞり、隙が生まれる。

ジュピターは鞘を放り出し、大剣を構えなおした。一撃必殺を狙い、間合いを詰めてくる骸骨兵に向かって渾身の斬撃を振るう。

決まったか、に見えたその剣はわずかに狙いを外れ、苔むした鎧の丸い肩で滑らされた。ジュピターがバランスを崩したその隙を狙って、骸骨兵の円月刀が振り下ろされる。

かなり無理な体勢で何とか体を捌いてかわそうとするが、

ぎぢんっ！

耳障りな音と左肩に走る痛みに、ジュピターの表情が歪んだ。

「がっ……!!」

歯をくいしばり声を殺す。骸骨と違って甘く見ていた相手だが、動きは熟練の戦士のそれである。次の一撃は、避けきれそうにない。

再び円月刀が振り下ろされようとしたそのとき。

どんっ!

不可視の衝撃波が骸骨兵を横から突き飛ばした。

「マーキュリーの放った『神力』の呪文である。あくまでも神官の護身のための術にすぎない魔法で、板金鎧で完全武装した骸骨に大したダメージは与えられないが、崩れた体勢を立て直す時間は稼ぐことができた。

「はあああっつっ!」

気合いとともにジュピターが反撃にかかる。剣と剣とが離れてはぶつかりあう互角の打ち合いが暫く続いたが、本来パワーもスピードも勝るジュピターの方が次第に骸骨兵を圧倒しはじめる。

そして。

骸骨兵の見せたわずかな隙に、ジュピターは懐に飛び込むようにして剣を叩き込んだ。

ごぐっ!

骨の碎ける音がして、骸骨兵の首が胴から離れ飛んだ。だが、普通なら勝負ありの所だが、相手は亡者である。頭をなくしてよろめきながらも、胴体だけがなおも剣を振り上げて向かってくる。

「このっ……しっこい!」

ジュピターは上段からの斬撃を受け流すと、体当たりで骸骨兵の体を突き飛ばした。首を失ってフランスをとれなくなった骨と鎧だけの体は、よろよろと後ろによろめいた。

この時を、魔法使いは待っていた。

「『電撃』！」

敵とジュピターの間合いが離れた今、マーズが唱えていた呪文を発動させる。突き出した腕の先から白い稲妻がほとばしり、骸骨兵の体を貫いた。骸骨は、命あるものが雷に打たれた時そうするように体をびくと波打たせると、そのままがらと床に崩れ落ちた。

砕けた骨の屑はしばらく錆びた鎧の間でうごめいていたが、やがてそれも動かなくなった。パーティーの間の緊張がようやく解れる。

「ジュピター、怪我は？」

マーキュリーが声をかける。

「ああ……うん、肩を、少し、ね」

乱れた呼吸を整えながら、ジュピターは左肩を押さえて答えた。見れば、シオルダー・ガードの下から血が細い筋になって肘へと流れている。深い傷ではないが、かすり傷というわけでもなさそうだが、息が上がっているのも、この怪我のせいだろう。

マーキュリーは防具の上から傷のあたりに手を触れると、彼女の信じる神に、静かに祈りの言葉を捧げた。祈りの「御利益」は、傷を癒し痛みを消し去る「魔法」という形で与えられる。

「……やっぱり、ね。迂闊だったわ」

その後ろで、砕けた骸骨兵の残骸を調べていたマーズが声をあげた。

「マキキュリーの術が効かない筈だわ。アンデッドじゃなくて、『竜牙兵』よ、これ」

「『りゅうがへい』？」

耳慣れない言葉に二人は首をかしげた。

「ええ。ドラゴンの牙で作ったゴーレムの一種。古い遺跡なんかじゃ、よく宝の番人として置かれてるわね」

「！と、いうことは……」

「そういうこと」

マーズはうっすらと笑みを浮かべた。

「いよいよ、お宝とご対面、ね」

*

冒険者達は今、あの竜牙兵が幾星霜もの間守り続けてきた扉の前に立っている。マーズの呪文で錠をとかれ、その分厚い扉はぎざぎざいと耳障りな音を立てて道を開いた。

「……ほんとに、ここが一番奥らしいわね」

そこは、今までの部屋とは明らかに趣を異にしていた。大人が五、六人は縦に並んで寝られそうな奥行きと幅のある広い空間。床は正方形の輝石が敷き詰められ、中央には腰の高さほどの台座が鎮座

している。壁際の床にはぐるりと溝が掘られ、地下水が涼しげな音を立てて流れていた。

「なんだか、気味が悪いな、この部屋」

「ええ」

入り口付近の床や壁を観察していたマーキュリーが頷いた。

「この部屋は、きれい過ぎますね。他の部屋は埃が積もっていたり、壁が崩れたり苔が生えたりと年月相応の荒れ方をしているのに」

この部屋は四方の壁も天井も床も、苔どころかクモの巣一つ塵一つなく、まるで今日完成したばかりのような清潔さが保たれている。

「何か魔法の力が働いているか、あるいは——」

「ここにも、『番人』がいる、ってことか」

マーキュリーは小さく頷くと、首を巡らしマーズの方を見た。

「さて……どうしますか？」

「どうするも何も、ここまで来て、引き返すわけにいかないでしょう」

鷹のような鋭い視線を部屋の奥に向けていた黒髪の魔術師は、そう言っておもむろに呪文を唱えた。三人の周囲にうっすらと青白く輝く光の結界が現れる。

「魔法はこれでなんとかしのげる筈。みんな、この中からはみ出さないでね」

一行はゆっくりと部屋の中へ足を踏み入れた。辺りは音もなく、何事も起こる気配はないが、三人はゆっくり、慎重に歩を進める。

すばかこーんっ！

☆\$∞#⋈Σℵ※〇∞★!

すぐ側で起こった突然の大きな音に驚き振り向いたのは、マーズとマーキュリー。

二人のすぐ後ろで、頭一つ高いジュピターが長身を屈めて呻いている。

何の予兆もなく起こった事態に、二人は周囲を警戒し神経をとがらせた。が、辺りには水のせせらぎより他に何の音も気配もない。そこにはただ、ごく普通の箒が一本立っているばかりである。

「……………箒？」

「……………みたい、です、ね」

「さっきは、無かった……………わよ、ね、こんなもの？」

怪訝そうに顔を見合わせるマーズとマーキュリー。そのうちに、

「いっ痛うううあぁーっつ！」

ジュピターが頭を押さえて立ち上がった。

「だっ……………誰だあこんなもんで殴りやがったのはっ！」

傍らに立つ箒を見つけ、怒りをあらわにその柄を掴もうと手を伸ばした、その時。

ひよいつ

箒は軽いステップでジュピターの手をすり抜け、

かばっこーんっつ！

脳天を思いきり打ち据える。

それは、誰もが我が目を疑う光景だった。あまりのことに絶句するマーズとマーキュリー。
「痛つつつつつうう……」

箒は再び頭を抱えるジュピターを見下ろすようにふんぞりかえると、くるりと向きを変え、腰を――箒に『腰』があるのかどうかは疑問だが――ふりふりと左右に振りはじめた。見れば、灰白色の石畳に、ジュピターのブーツの足跡が黒く浮いている。箒はそれを掃き清めているらしい。一行がその様を呆然と見ていると、今度は、

ぱたっ ぱたっ ぱたっ ぱたっ ぱたっ
ぱたっ ぱたっ ぱたっ ぱたっ ぱたっ
がっきよん がっきよん がっきよん がっきよん

台座の影からモップとバケツが現れた。

「わ……私、何かすごく嫌な予感がしてきたわ……」

頭を抱えたマーズは、軽いめまいを覚えながら台座の前へと進み出た。『番人』たちは、侵入者には目もくれずにせつせと掃除に励んでいる。

台座の上面は蓋になっていて、その上を上古代語の文字の帯が縦横に走っている。薄ぼんやりと蒼い光を放つそれは、荷物を縛る麻紐のようにその蓋を呪縛しているようだ。

「魔法で封印されてるわね。パスワードが判らないと開けられないわ、これは」

「パスワード、ですか……」

困ったように考え込むマーキュリー。何の手がかりもなくパスワードを見つけるのは、殆ど不可能に等しい。ジュピターはモップ達の方をちらりと見ながら、

「『お掃除大好き』とか?」

気楽にそう言った。

「やめてよ、冗談じゃない。……ま、どっちにしても、パスワードは上位古代語の筈ね」

「では、『我愛掃除也』ですか」

ヴ……ン

不意に弓の弦が震えるような低い音がしたかと思うと、封呪文の淡い光が小刻みに揺らぎ、やがてすうっ と暗くなった。

「ビンゴ!」ジューピターは得意げに拳で掌を打った。

「……うそ……」

半分呆然としながら、マーズは恐る恐る台座に手を伸ばした。呪縛の解かれた蓋は簡単に持ち上がり、その裏側に埋め込まれた銘板と、丁寧に納められた革張りの古い魔導書が現れる。上位古代語で表紙に型押しされた表題は『箒円舞』ブルーム・ロンド。銘板によると、この術の由来は次の通りである。

はるかな時の彼方、魔法を至上の価値とした時代。偉大な魔術師が民を導く王として君臨し、世界は各種の魔法語に通じた有能な魔法使いたちによって治められていた。この地を治めていた領主も魔法使いであり、多くの有能な術者が仕え、日々呪文の研究にいそんでいた。

そんな術者の一人が、ある時画期的な呪文を完成した。

『箒円舞』ブルーム・ロンド——箒やモップにひとりで掃除をさせる術。人間が魔法の力で道具を操る呪文は存在

していたが、これはゴーレムのように簡単な命令を与えるだけで動く道具を作る魔法である。

この術は考案者自身の思いをはるかに超えて、画期的な変革を国にもたらした。それまで多くの人員を割っていた城の清掃作業の合理化を一気に進めたのを皮切りに、様々な場所で『踊る箒』は人間にとって換わった。その結果、大勢の人間が職を失い、生活の糧を奪われた人々が街に溢れ、やがてそれは大規模な反乱を起こす引き金となった。もともと領主の施政に不満を抱いていた民の怒りは一気に爆発し、内戦は二年半もの間続いた。

考案者は、荒れ果てた故郷の大地を前にただ嘆くより他になす術もなく佇んだ。至上の価値と信じた魔法の研究。自らの手で生み出したたった一つの呪文が、国を滅ぼし多くの人々の生活を破壊した。戦後の混乱の下、彼は唯一手元に残った『箒円舞』の自筆の魔導書を封印し、この地から姿を消したという。

「……はああああああ………」

長い溜息をつくマーズ。

「このダンジョンのお宝って、あのくそ生意気なホウキを作る魔法のことなのか？」

「……………そーよ。残念ながら」

ジュピターの問いに答えるマーズの機嫌は最悪である。

「なあにが『亡国の禁断魔法』よ！箒やモップをびよこびよこ踊らせて何が面白いの！」

「でも、これは大発見かもしれません」

ふてくされるマーズをなんとかフォローしようとするマーキュリー。

「こんな話は少なくともこれまでに発見された文献には残っていないはずです。魔術師ギルドか賢者の学院にでも持ち込めば、それなりの評価が得られると思いますよが」

「……それなりの、ね」

マーズの機嫌は直らない。

「なあ、もう帰ろーぜ。何だか腹も減ったし」

失意の冒険者達を尻目に、今は亡き主の言いつけ通りにせつせと働くモツプ達。彼らの磨き上げた石畳の床は、数百年の時を経た今も一点の曇りもなく輝いていた。

——だんぢょん攻略入門・終

セーラームーンRPG① だんぢょん攻略入門

著 深森薫

表紙 飛鳥圭

1998年 11月 初版発行

2023年 4月 PDF化にあたり加筆修正

発行者 Bitter & Sweet (深森薫)

<http://mimorikaworu.yomibitoshirazu.com/>